九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

プラトンにおける知識論成立の一断面 : 名の正しさ（ή τών όνομάτων όρθότης）の問の意味

水崎, 博明
第一薬科大学 : 講師

https://doi.org/10.15017/27413

出版情報：哲学論文集. 3, pp.73-94, 1967-09-30. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

プラトンにおける知識論成立の一断面

——名の正しさ（ἡ τῶν ὀνομάτων ὀρθότης）の問の意味——

水崎博明

知識[1]というものについて我々がはんとうに論じうるためには、最小限どれだけの手続きが必要であるとプラトンは考えたか。この小論はこれについての考察を、プラトンの対話編『クラチュロス』の主題『名の正しさ』のもつ問題意識を明確にすることによって行うものである。——すなわち、『名の正しさ』の問は、いかなる場所で知識論を成立させうる問となるのか。名（ὄνομα）、レーマ（ῥῆμα）、ことがら（πράγμα）、ロゴス（λόγος）、あり（οὐσία）、形相（εἶδος, ἰδέα）等[2]はどう考えられたか。

そこで考察は以下の順序で行われる。

一　資料と分析

(1)　名の正しさをめぐる二説

(2)　ヘルモゲネス説批判

(3)　語源論における展開

(4)　クラチュロス説批判

二　分析と転位

(1)　δύναμις（「できる」こと）―その典型的二重構造

(2)　ロゴス　真　正しさ

(3)　名　すがた　もの

(4)　立法家と問答家

(5)　批判

――結び――

一

先ず、我々の考察を、その共有の土俵ともいうべきものをこしらえることによって始めよう。それは以下の資料と分析である。

(1)　名の正しさについて相争うと見られる二つの説が語られる。即ち――

クラチュロス説

〈a〉「あると いわれるもの」の各々には、自然本来もともと(φύσει)生じたものとしての名の正しさがある。又、何であれ人々が自らの言語の部分を発声しながら、そう呼ぶことを協定しながら呼んでいるようなもの、そのものが名であるというのではない。否、ギリシャ人にも外国人にも、すべて万人に同一なものとして、名の何か一個のある正しさが、もともと生じている。[3]

〈b〉それがとにかく名である限りの名は、すべて正しくおかれており、[4]名を知るものはことがらを知るものであり、そしてこれが存在を知ることの、又発見することの唯一の方法である。何故なら、名はすべて同じもののもとに(κατὰ ταὐτόν)、同じものに向って(ἐπὶ ταὐτόν)出来たのだと人は考えて語るのだから、すべて名は名をたてるものにとって調和するものであり、従って、彼はその時知っていて名をたてているといえるのだから。[5]

〈c〉ヘルモゲネスにはヘルモゲネスは名ではない。[6]それは本性(プュシス)もそうある人の名だ。

〈d〉虚偽を語ること、主張すること、述べること、呼びかけることなどはない。[7]

ヘルモゲネス説

〈a〉名の正しさとは、協定(シュンテーケー)と同意(ホモロギア)であり、又法定(ノモス)と習慣(エトス)である。だから、何であれ人があるものに名として立てるそのものが、正しい名であって、又別のをおきかえれば、そのものがそこで又正しい名となる。[8]

〈b〉従って、人々が「人」と呼ぶものを、自分は「馬」と呼び、又「馬」と呼ぶものを、「人」と呼ぶことも可能である。つまり、公的(デーモシア)には「人」が名である時、私的(イディオス)には「馬」が名であり、又、公的に「馬」が名である時、私的には「人」が名であることも可能。[9]

(2) ヘルモゲネス説批判

〈a〉第一の批判は、[10]全体(ホロン)たるロゴスの真偽が可能ならば、部分たる名の真偽も可能だとするものである。その推論は——

i ロゴスは真又は偽である。

ii その全体(ὅλος)も部分(τὰ μόρια)も真又は偽である。

iii 大なる部分（τὰ μεγάλα）も小なる部分（τὰ σμικλα）も、すべて（πάντα）部分は真又は偽である。[11]

iv 最も小なる部分（σμικρότατον）[12]とは名である。

v 従って、名は、真又は偽なるロゴスに属するものとして語られる。

vi 故に、いやしくもロゴスが実際真又は偽として語られるならば、名を真なる名、偽なる名として語ることがある。[13]

〈b〉 第二は、智―無智（φρόνησις, ἀφροσύνη）の実在からことがら（プラーグマ）の確在を推論し、次の行為の確在の考察への橋渡しをしながら、究極的にはその批判と内在的に連関し合う、間接的だが最も包括的核心的批判である。[14] 即ち、

i この世のある人々は有用（ウレーストイ）、ある人々は無用（アネーロイ）である。

ii 前者は智（プロニモイ）ある人、後者は無智（アプロニモイ）な人である。

iii 智―無智が実在する限り、〝万有の尺度は人〟なるプロタゴラス説は真理ではなく、従って、ことがらはそれ自体のあるあり方をもつものとして確固（ベバイオン）としたものである。[15]

〈c〉 第三は、右の〈a〉〈b〉のうち、特に〈b〉から橋渡しをされ、ことがら（πράγμα）が確固たるものであれば、行為（πράξις）もそうである。つまり、「あると言われるもの」の或るひとつの「すがた」である。故に行為は、「本性に適った」又は「正しい思いなしに適った」仕方で行われねばならず、「我々の思いなし」[16]によって行われてはならぬ。後者では、我々は誤って何ごとをも行い得ず、前者により、我々はより多く、かつ正しく行い得るというわけで、当面の目的「名の正しさとは何か」を、「名づけることの正しさとは何か」と、行為の本性の考察という形に変更して行く批判である。[17]

さてそれは、「語ること」も一個の行為だから右の条件の下にあり、他方、我々は「名によって区別をしながら(διονομάζοντες)」[18] ロゴスを語るのであるから、名づけることは語ることの部分である。故に、それも又同じ条件の下にあり、

「本来そうすべきその仕方で、かつ本来そのものを用いてそうすべきそのものを用いて、我々はことがらを名づけ、ことがらは名づけられねばならず、その場合にのみ、我々はより多く目的を達し名づけることが出来る」

というわけで、「名づけること」の行為としての本性が、以下、「梭を使うこと」とのアナロジーで思考される。必要な変更を加え辿ると、

i それを梭を使って織らねばならぬそのものを、梭を用いてそうする。

i° それを名づけねばならぬそのものを、名を用いてそうする。

ii 道具である梭を用いながら、縦糸と横糸とを分ける。

ii° 道具である名を用いながら、相互に何らかのことを教え合い、又ことがらのあり方を判断する。

iii 梭は織物を織る一種の道具である。

iii° 名は何ごとかを教えことがらを判断する道具である。

vi 織物の心得ある者が、梭を上手に、即ち織物の心得に適った仕方で用いる。

vi° 教え方の心得あるものが、名を上手に、即ち、その心得に適った仕方で用いる。

v 織物師が梭を用いる場合、技術をもつ大工の作品を上手に用いる。

v° 教え方の心得ある者が上手に名を用いる場合、技術をもつ立法者の作品を用いる。

iv 大工は、「本性的に梭の働きをなすもの」、即ち「まさに梭であるもの」、梭の「すがた」に目を向けて梭を作る。

vi° 立法者は「まさに名であるもの」、名の「すがた」に目を向けて名を作る。

vii 梭はすべて梭としての「すがた」をもつが、何を織るかという目的に応じて、それぞれに適した本性を素材(ὕλη)に与え、作品を作らねばならぬ。但し、同じ目的の為に同じ道具を作っている場合でも、素材は同じでなくともよい。[19]

vii° 名はすべて名の「すがた」をもつ。[20] しかしそれは各々にふさわしいものとしての「すがた」である。その条件に合えば、[21] どんな音声や綴にその「すがた」がおかれてもよい。

viii° viii 各々にふさわしい梭の「すがた」を知る者は、その道具の使用者、織物師である。各々にふさわしい名の「すがた」を知る者は、使用者たる問答の心得ある者である。

ix 大工は織物師の監督の下で作品を作り、織物師は出来上った作品を判定する。

ix° 立法家は問答家の監督の下で作品を作り、織物師は出来上った作品を判定する。

今とりあえず以上のアナロジーを図式化すると、次のようになる。

行為	i 道具一般	ii 使用の目的	iii 道具の定義	iv 技術的使用者	v 技術的制作者	vi 制作の見本	vii 素材	viii 見本を知るもの	ix 制作者の使用者関係
梭を使う	梭	織ること	織るための道具	目的を知る者	技術を梭のもつ大工	すがた	木	織物師(使用者)	使用者が制作者を監督する
名をつける	名	教示判断	教示と判断のための道具	目的を知る者	技術をもつ立法者	名のすがた	音声	問答家(使用者)	右同

以上の批判でヘルモゲネスの「協定」説は否定される。

(3) 語源論における展開

さてそこで、「しかしそれでは名の自然本性的な正しさとは、一体何か」という問が提出され、[22]これに対する回答という形で、以下語源論が展開される。[23]プラトンの意図は何であったか。都合上、その最も骨子となる資料とその分析とを以下にあげる。即ち——

〈a〉 i 右の問の解答に先立ち、先ずソクラテスをして「自分はそれについては何も語ってはいないし、又知ってもいないのだ。実際のところ明らかなのは、名は一種の自然本性的な正しさをもち、どのような事物にであれ、その事物に上手に名を立てる方法を知ることは、すべての人に属することではないという、その限りだけだ」[24]と念を押さしめ、考察を限定し留保の態度を堅持する。[25]そこから

ii 解答の目論みを「名はそれぞれひとりでに偶然出来ているものではなく一個の正しさをもつものだと、名がそれ自身証拠だててくれるのではないか」という点に求め、

iii その目論みを、生成流転する事物にではなく、「常にそうあり、もともと生じている事物」について調べてみようとする。[26]結果は、

〈b〉 i ὄνομα（オノマ）＝ῥήματα（レーマタ）＝λόγος（ロゴス）（名＝複数の述辞＝ロゴス）という等式が成立する。[27]即ち、名をいくつかの要素的レーマの合成たるロゴスとみなし、その成立如何によって名の正しさ如何を判定するのが、語源論の原理であったことが明らかにされる。

ii この原理は、それにより語源論を行えば行うほど、その有効性を疑う機を熟させ、結局、そもそもその第一の

名たるレーマの正しさの成立は如何、という問を呼び、字母（ストイケイア）―綴（シュラバイ）の比喻を語らしめるに至る。

iii だが、第一の名であれ、それより後の名であれ、名の正しさはあるひとつの正しさであり、名は名である点では何ら相互に相違はない、[28]といわれ、名の定義が再確認される。つまり、名の正しさの問と、レーマの正しさの問は同じ問であるとされる。[29]

iv iiの問は、第一の名が要素として現われた時に中止されねばならぬとされ、要素は端的に明らかであると考えられる。[30]

v 他方、「何々である」と言われることがら各々にとって、それがそう呼ばれる「原因」（アイティオン）は何か、と問われ、それは名をたてるもの、即ち思考 διάνοια だと答えられる。[31]

vi かくて、思考が文字と綴りによりことがらの「あり」（ウーシア）を模倣し、自然本性的な正しさを達成する、[32]と解答される。

以上が最も主要な資料とその分析である。

(4) クラチュロス説批判

右の解答により、実はクラチュロスの最も意とするところであった模倣説を導出し、その吟味に着手する。吟味は、先ず模倣における原物と模像（ことがらと名）との区別の同意から始められ、[33]以下の様に行われる。

〈a〉 i 原物―模像の関係について人が思考する場合があり、そこに「ふさわしくかつ似ている」又「異る」という観点を発見する。[34]

ii ソクラテスにおいては、その観点による「正しい」又は「虚偽」の「ふりあて」（διανομή）が成立するといわれ、名の場合、「正しい」（オルトー）に加えて「真の」（アレーテー）とも言うことが可能とされる。[35]

iii　他方クラチュロスは「ふりあて」は、名の場合、常に正しく行われることが「必然」であるとする。[36] 即ち、名とことがらの関係は、絵画（肖像）と実物（本物）との関係と異るとされるが、

iv　これは、名の場合も絵画の場合も実物（本物）を前にして模像（肖像）を直示することにより結びつきを確めるという、基礎的手続のもつ明証性と有効性により、とりあえず否定される。感覚の順用である。

v　しかしクラチュロスは、文字の場合、[37] 付加、脱落、挿入は、即座に文字を「異る」ものにするからiiiは可能と再度主張する。

vi　これに対しソクラテスは、「数から出来ているもの」(τὰ ἐκ τινος ἀριθμοῦ)と「あるこのようなもの」[38](τὸ ποιόν τι)とを区別し、模倣における原物―模像の関係においては、両者は即一であると考えられてはならぬ。もし即一なら、原物が二つあり、最早模倣とは言えなくなるから。とこれを拒否し、ここには「或るこのようなもの」といわれる仕方で把握される別種の正しさを求めるべし、となし、そして即ち、「ロゴスがそれに関しているそのことがらの型(τύπος)が内在している限り、何ら劣らずことがらは名づけられ、又語られる」という。[39]

〈b〉　右の結果を例示しつつ「協定」説を新たな形で復活させる吟味である。先ず「もし名がそれらから合成される第一の名（字母）が、最初に何か一個の類似性をもって基礎になかったとしたら、名はいかなることがらにも決して似ることはできないだろう」[40]と言い、例を出して考える。即ち、「固さ」という同一語の二つの方言σκληρότης とσκληρότηρ をとり出し、次に、両者は最後の字母σとρにおいて「異なる」が、それは流れを示すという力(デュナミス)において「似たもの」である。又「軟かさ」を表わす力をもつλは、「固さ」というものと力において「似ていないもの」である。こう同意させ、しかしこのように、「似たもの」「似ていないもの」の両方の字母を含んだ二方言が、それにも拘らず共通に理解されるとすれば、それは、甲が「乙は原物と似ていない名を発声していても、その時乙は原物を

心にいだいているのだ」と知り(ἀγνώσκειν)[41]、「乙はそのようにしているのだ」と甲自身と協定するという、その習慣によってであることをとり出し、音声学的類似が名の美しき作成にとり必須条件ではないと結論する[42][43]。

〈c〉 かくて「第一の類似性」は[44]一方で堅持され他方で拒否されるという緊張をもちながら、ここに名の能力の考察によりその二義性が明示され、クラチュロスの模倣説は究極的に批判される。[45]即ち——

i 名をたてるものは、ことがらがそのようであると思うそのようなものとして名をたてることを再確認し、そこに正しく考えない可能性を示す。クラチュロスがそれに対し、

ii すべて名は、同じものの下に(κατὰ ταὐτόν)、かつ同じものに向って(ἐπὶ ταὐτόν)生じるのであって、そこに必ず何か一個のものが対応し自己にとって調和するから、[46]人は名をたてる場合、知っていて立てていることが必然だと反論する。しかし

iii 或る一個の孤立した閉鎖的体系内部の自己調和は、幾何学におけると同様可能であって、右の論は理由にならぬと断じ、ヘラクレイトスの流転説と反対の静止説で、それと同様誤った語源論を例示し、他方

iv いまだ名がない時に、いかにして知っていて名をたてたのか、という自己憧着を含むことをとり出しこれを論駁し、そして

v ことがらがもし同族であるとすれば、それら相互を通じて真実を明らかにし、次に名がよく立てられているかを吟味する、これが知と発見の唯一の方法だとする。[47]

さてこのようにして批判はすべて終わり、その残る唯一の方向を「すがた」の確在ということの中に求めて行く。即ち、探究は「ある顔とか何かそういったものが美しい、そしてそういったすべては流れると思われる」ということの中にではなく、「『美しい』というそのこと、『よい』というそのこと、その他まさに『何々である』といわれる

そのひとつひとつを、それは常に自己同一を保つのだ」ということの発見の中にこそ向けられるべきだと語られる。[48] そして、名ざしは、少くともその名ざしの時においてともかく成立し、それに伴って、知るもの知られるものも成立するのではないかといわれる。[49] しかしこの探究の方向は、まだ夢見ていることなのだと、ソクラテスは言うのである。

二

さて以上の土俵の中で考察を始めよう。

(1) δύναμις ——その典型的二重構造

手がかりとして δύναμις（「できる」こと、能力、力）というものを、やや一般的なかたちで考えてみよう。

最初に、δύναμις は、或る意味では ἔργον（作品、完成、現実）ではないが、しかし又或る意味では ἔργον であると言ってよいだろう。というのは、δύναμις が δύναμις であるのは、まさに作品を作りあげる（ἐργάζεσθαι）ことが現実的に可能であることであり、そして、しかもいまだ現実的に作り上げていないことである。即ち現実的ということも二つの仕方で語りうるのであるが、しかしそれは、「いつか現実化しうるということが、すでにもともと現実的に生じていた」ということとして、一つのことと言えるだろう。そう考えられるからである。即ち、一なるこのことを二つの局面が成立たせているといえる。(A) すでにもともと（φύσει）生じていた ἔργον として我々が δύναμις をもつこと——できる——と、(B) 我々がその δύναμις を現実化する——する——との二つである。

(A) における ἔργον は、まさしくそう成立していたとしか言えぬ ἔργον である。しかし我々が、そのもともということの中に我々に先立つ自然を認め、これを神と言いかえることが出来れば、[50] 我々は、神がそれを成立させた、といえるかも知れぬ。だがその場合、神の δύναμις はいかにして成立したか、という問は、最早無限背進を招くだけで

あろう。[51] 神においては、ただ端的に成立していたとしか言えぬだろう。そして、神において δύναμις が端的に成立する時、それは即、端的に作品が完成するのである。だからそこに我々が認めるのは、「できうる」ということと「でき上る」こと、「いつか」ということと「もともと」ということ、これらはもともと結び合わさっていた。そしていつか「今」、我々が発見している、ということであろう。

さて、神はかくの如きものであるとして、我々も δύναμις を、ある端的に成立したものとして受けとるものであるから、神と我々との間に何の相違もないと考えられるかも知れぬ。だが我々のその受容は、そもそも我々のみで可能であろうか。絶対に否と言わざるを得ぬ。神と我々とは同じレベルで相並ぶのではない。否、我々がそのようなものである時、それは、我々が神的であることを意味するのだ。そして、しかも神にあっては「できうる」時「出来上る」のであって、人間的行為は何ら不要であるのに対し、我々はかかる神の確在のもとで、その完成した作品をうけとり、δύναμις を与えられ、そして人間的行為によって、[52] いつかその δύναμις を現実化し完成させるのである。従って我々の δύναμις は、神の完成した ἔργον (= πράγμα) が、[53] あたかも行為によって δύναμις から完成させられたかのごとく、πράγμα から πρᾶξις を通じ遡行して行った時のそれであり、そして我々の行為は神のそれの模倣であろう。[54] 行為をめぐる全関連は、かくて神における場合と我々における場合との、[55] このような典型的二重構造をもち、しかもすべてを現実化し完成している自然の先行によって、一つになるのである。

(2) ロゴス、真、正しさ

以上の考察をもとに、我々はプラトンの思索を能う限り正しく追ってみよう。

さてヘルモゲネス批判の〈a〉に着目しよう。というのは、我々には今、この批判の正しい理解こそ『クラチュロス』の、ひいてはプラトンの思想全体の理解を左右するものと理解されるのであるが、しかし従来あまりにも誤解されて

きたからである。[57]

さてその誤解であるが、次の二点にその主要な原因があると思われる。即ち——

(A) ロゴスというものをギリシャ人プラトンに則して理解しえなかったこと、

(B) 「真」と「正しさ」との使用が、あるいはそれをめぐる思索が、プラトンにおいてきわめて柔軟かつ厳格であったことの無理解、

この二つである。それ故我々は正しい理解に努めてみよう。

ロゴスについて言えば、それは何より基本的には「集まり」「集めること」「数え上げること」「拾いあげること」であることを知らねばならぬ。[58] そこでこの「集めること」を分析してみると、そこに、その行為に先立つ目的であり、行為の現実化であり完成である「集まり」即ち、一なる「全体」と、いまだ集められていない未完の、それ故「集められるべきもの」すなわち、多なる「部分」とを発見するであろう。前者はロゴス、後者は名であるから、[59] そこで、ロゴス＝集まり＝完成＝現実＝目的＝全体、名＝集められるべきもの＝未完＝可能＝出発＝部分、ということになり、両者は、λόγος＝ὄνομα＋ὄνομα＋……＋ὄνομα という一つの等式になるだろう。[60]

他方、ロゴスが「真」(ἀληθής) といわれる場合、それは又基本的には「かくされていないこと」「忘れられていないこと」「残されていないこと」である。[61] 又「正しさ」とはまさしく「直しさ」であり、「素直にまっすぐまさしく当のそのものに向かい、はずれずに即すること」である。

さて、ロゴス、真、正しさが以上のようだとすれば、「集める」という行為を完成させるには、我々は「集められるべきもの」全体を——というのは「集める」とは「集められるべきもの」を「集める」のでなければ、一体何を「集める」というのであろうか、仮定はナンセンスだから——その全体の知により、全体から「かくされ忘れられた」もののないように「集めてしまう」のでなければならぬ。しかしその為には、個々部分をひとつひとつ「直しく」[62]

集めの手に「ふれ」させ、一つに集めねばならぬだろう。しかし逆に、その部分への「ふれ」が存在理由、即ち「目的」をもち、その「目的」の為に「ふれる」のでなければ、言いかえると、完成たる全体の知によって知られて「集められるべきもの」とされるのでなければ、部分への「ふれ」は、意味を失ってしまうだろう。

さて以上のようだとすれば、全体たるロゴスが成立した場合には、全体は「かくされていない」のであり、その時のみ、部分はまさしく「直しくふれる」ことの目的に今達したわけで、そこで、ものに「直しくふれる」ことと、ものが「かくされていない」こととは同じ、即ち、部分も又「かくされていない」ことになるといえよう。(63)

プラトンの誤解されてきた先の批判を、右のようにして我々は正しく理解できるだろう。

ただしかし、それは、我々がとり出したような、行為の分析による全体と部分の行為的連関というものを、いまだ十分に明らかにしてはいない形で行われた批判であって、その意味で、いわば露払いの意味をもつものであろう。(64) しかしそこにおいて、名の正しさの向かうべき有意味な方向をはっきりと指示し、そして確かな第一歩をそこに印したのである。

(3) 名、すがた、もの

ではその第二歩は何であろうか。先程の考察では、行為を完成させるには、全体の「知」部分への「ふれ」というものが必要であるとされた。しかし今はそれぞれがどんなことかを問うべき時であろう。このようにして、行為の本性の考察というものが、プラトンにおいても同様必然なのである。いやむしろ、我々の方が、プラトンに対する誤解を解く為に、先走りして行為の分析に若干手がけてきたのだと言った方が、事実であろう。

そこで今我々は、我々が先に δύναμις の考察をしていた時、「神においては δύναμις 即 ἔργον であり、人間的行為は何ら必要ではない。否、我々こそ人間的行為によって δύναμις を現実化し完成させねばならぬ」と言っていたことを思い出そう。するとその時、我々は、行為が行為であるのは、それが完成し目的を達するまさしくその時「今」

なのだが、しかし、完成させ目的に達せしめるそのプロセスこそ、我々の行為であるということができよう。我々は今「プロセス」と言った。それは、我々が「行為する」のは「行為できる」からであるが、しかし我々には、その「行為する」ことは「行為しようとする」という行為の中に置かれているからである。言いかえると、「行為する」ことは「行為していると思う」ことの中に置かれているからである。従って我々の問題の場合、このことは、ものに「直しくふれ」その限りものは「かくれないで現われている」からと言って、そのものは必然的[56]にその「集められるべきもの」であるか、という問を、それ故又、そもそもいかにしてそのものを「集められるべきもの」だと知りうるのか、[66]「全体の知」はいかにして成立するのか、という問を、「我々の行為」の考察において必然たらしめるのである。

さて我々は、「集められるべきもの」が、これこそ「集められるべきもの」だという「しるし」をもっていて、我々が「見知る」[67]ことができたら可能だ、こう言えるだろう。ではその「しるし」はどのようにしてつけることが出来るのか。それには、一つのものごとの現われた「すがた」を、我々の認識能力のもつ自然本性的な「直しさ」で見てとり、そして、その見られた確固たる「すがた」を「素材」に形象化すればよい。かくてそのものは「もの」と直結し合札（σύμβολον）となる。名は「すがた」が、素材たる音声と綴とに形象化されたものとして、「もの」と直結する。だがしかし、そもそもそれはいかにして可能か。「同じ」すがたのものには「同じ」しるし、「異る」すがたのものには「異る」しるし、というように、「すがた相互の関係」[68]に配慮して「すがた」に「一定性」を与えることによってであろう。

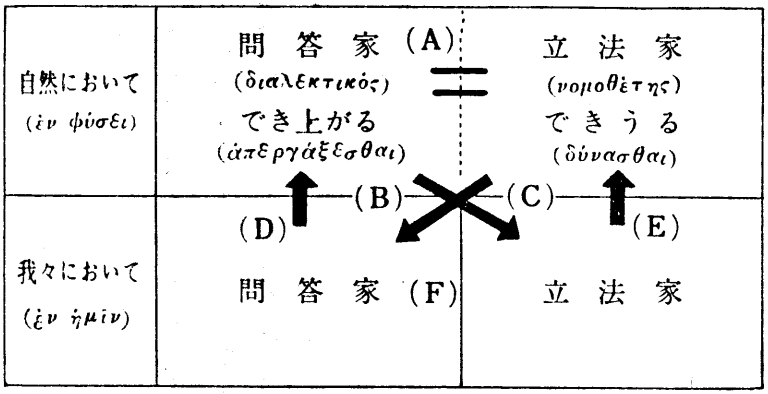
こうして名は「すがた」であることによって、集められるべき δύναμις をもち、ここに λόγος＝εἶδος＋εἶδος＋…＋εἶδος という新しい等式が成立する。従って又、我々の先の問は、[69]「すがた」はいかにして「集められるべきも

の」となるか、という問に、形をかえることが出来るだろう。そして結局、「全体の知」とは「すがた相互の関係の知」であり、「ふれ」とは「すがたを見る」ことであることになるだろう。まさしくこのことは、「人間がものを知る働きは、人呼んでエイドスというものに則して行われなければならぬ」[70]という『パイドロス』の主張そのものといえる。

(4) 立法家（ノモテテース）と問答家（ディアレクティコス）

しかし今の結論をふたたび問うて「ロゴスとはエイドス相互の結合だとして、それならそのことは如何にして可能か」と尋ねてみよう。何故なら、これまでの考察から、そのことの成立とその「知」とが、部分への「ふれ」即ち「見る」ことを成立させ、行為たらしめるのであった。言いかえると、「名の正しさ」を行為として成立せしめるのであった。こうなろうからである。しかし『クラチュロス』は厳しくその問をひかえている。「我々に明らかなのは『名が一種の正しさをもつ』というそのかぎりだけだ」[71]と。我々は、その留保の中から、しかし、「もしロゴスが成立するならば、その行為の全関連は、そして知ることとはどういうものであるか」ということについての素描をプラトンが行っているのを、先に見ることが出来ていた。[72]そこで、以下簡単にそれに言及することにしよう。

さてそれは、名をたてる者＝立法家（νομοθέτης）と、名を用いて問答する心得のある者（διαλεκτικός）との先後関係の考察であったが、我々は他方、神と人間との間の διαιρεσις をめぐる典型的二重構造にふれ、さらに全体と部分の行為的連関のあり方を考えてきた。そこでこれらの考察を併せ考える時、次のような図式を作ることが出来るだろう。それぞれを説明すると、



i (A)は「できうる」即「できあがる」という神の本性を示す。

ii (B)は「我々における立法者」に対し監督する問答家は、すでに知るものとしての、「自然における問答家」であることを示す。[73]

iii (C)は、「我々における問答家」は、「自然の中における立法家」の名を用いることを示す。

iv (D)(E)は、それぞれ(C)(B)によって δύναμις を与えられて行為する目的を示す。

v (F)は、我々における問答家と立法家との間には断絶があることを示す。[74]

さて我々は、以上のことから δύναμις の典型的二重構造というものが、実は我々の、知識の構造の、存在の構造の、行為の構造の二重性すべてを規定していたことに、今にして気がつくであろう。そして今や、それらの典型的二重性は、単なる位相的並列性をではなく、まさしく言葉の真の意味において、典型的実存性を語るものになったといえるのではないだろうか。何故なら、かかる二重構造が閉われてしまう時、そこに、知識の、存在の、行為の二義性と欺瞞[75]を招き、知識は思いなしだと、存在は絶えず流転する思いなされるだけのものだと、行為は慾望だとされる。だがしかし、我々が行為的連関の中に自らを引き据え、行為を全うしようとする時、我々は最早我々だけではなくなり、かかる自己欺瞞は拒絶され、真実の知への追求を迫られるのである。こうして「名の正しさ」の問は、それを解明し分析

しようとすれば、それは自らを転位させ、そこに διαλεκτική（ディアレクティケー）への道を我々に残すことになるのである。

(5) 批判

しかしこの「名の正しさ」の問の、分析＝転位という事実は、またそこに、批判＝転位という事実を残していた。従って我々は、今や「名の正しさ」の問のもつもう一つの意味「批判」を語ろう。

さて考察から、それによって吟味すべき試金石は、名が用いられたかどうかという点にある。ところで、名は「すがた」と「素材」から成ると言われた。[76] 彼らヘルモゲネス、クラチュロスは、その主張の表面的相違対立にも拘らず、共通して二人とも感覚を逆用し、名を半ば用い、半ば用いないのである。どういうことか。彼らは、一なる名が、その素材たる音声と綴において、時代と社会により様々に異り変転し流れるという現象をとらえ、そして、あたかも「すがた」そのものがそのような流転の中にあるかの如き主張を、しかもまさにその「すがた」の確在に頼ってなすのである。というのは、まさしく流転の原理たる素材（1 2 3 …… n）にたいして神的な正しさをもつ感覚（1 2 3 …… n）を対応させ、かくてそこに「多」なるパトスが現われるということを一方でとり出しておき、他方、その「すがた」としての確固たる「一」の成立（＝「見る」の成立）がいかにして可能であるかという根拠（ロゴス）を全く覆っておきながら、しかもその根拠を瓢窃してきて、「多」なるパトスを「多」なるすがたとしてとり出し、そしてこれをもとの「一」なる名のすがたの「多」とすりかえるのである。こうして彼らが「見ること」の可能な根拠を全く覆い、自己を単なる鏡として現象の流転を空しく反映する意識と化する時、かれらは名を用いないのである。従って、たとえ自己との調和（συμφωνεῖν）ということを、反映（μίμησις）が知識であるという主張のために強調しても、調和すべき何らのロゴスも自己の中にないのであれば、およそそれは原理的に不可能だし、自らを守りつつ可能だとすれば、調和ということが言える根拠を瓢窃しなくてはならぬ。しかしその時最早彼は彼でなくなるだろう。そして、このよう

にして彼らがその立場に固執し流転の世界に自らを埋没させる限り、かの我々の存在構造とその典型、その究極にある「学ぶべき最大のもの——善のイデア」[77]は、全く覆われてしまうのだ。そして彼らが所有するのは、まさしく「無智の無智」なのだ。

さてソクラテス＝プラトンは、かかる在在からの「のがれ」(φυγή)[78]と魂の永遠の生のためには、流転の世界を空しく追うのではなく、この流転の世界に対しこれをたしかな世界に根拠づける「善のイデア」にひきいられた「すがた」の世界、この世界の成立のために、「美しい」というすがた、「よい」というすがたの確在を「よい」と肯定し、そしてそう肯定する自己を吟味しながら、一歩一歩進む、かの「前提的探究」[79](ὑπόθεσις μέθοδος)すなわち διαλεκτικὴ(ディーアレクティケー)の上昇こそが、唯一の道だとする。

さてかくて、批判は又転位だったのである。

我々の考察は、いまやすべて終った。結論を語ろう。

「『クラチュロス』は、名の正しさの問を、我々がそれに乗って大海を渡る危険を冒す『ロゴス』[80]の成立の問、『行為』の問としてまともに受けとり、その分析により問それ自身を転位させ、対話を志す者すべてに『名を用いていると思うことを真に用いることへ、知っていると思うことを真に知ることへ転換せよ』という、ひとつの強力な批判を残した」と。

註

(1) ἐπιστήμη である。又「知」とも略して用いた。「智」を φρόνησις にあてた。

(2) ὄνομα を「名詞」「主語」と特に考える必要はない。むしろ「しるし」である。ῥῆμα も「動詞」である必要は特にない。一部「述辞」と訳した。πρᾶγμα は、「こと」「もの」「ことがら」「ものごと」であり、訳語は一定させていない。プラトン自身には、所謂、knowledge that knowledge by acquaintance という区分の二つの「知識」はない。

(3) Cra. 383ab、以下特記せぬ引用は同書

(4) 429b　(5) 435d～436c　(6) 429c 名「ヘルモゲネス（'Ερμογένης）」は「金持の神様ヘルメスの生まれ、（'Ερμῆς + γένος）」という意味であるが、実際には、当人は貧之であったらしい。cf. 384c、口下手だと自ら言っている。cf. 408b

(7) 429de cf. Euthyd. 283e～288a

(8) 384cd　(9) 385a　(10) 385bc

(11) ここではレーマとは表現されていない。

(12) 後の、στοιχεῖα－συλλαβαί（要素と束ねたもの）の比喩が既に暗示されている。

(13) 「語る」は λέγειν である。ここでは通常の訳語を用いた。二(2)以下の推論でここを読みなおすと、興味深い。

(14) 386ae　(15) cf. 41頁註40　(16) cf. 註(74)二(4)　(17) 386e～390d　(18) cf. 47頁、註(68)　(19) cf. 50頁　(20) 422c

(21) 「同じすがたを与えるかぎり」という表現は、後にくりかえし「ことがらのありが名の中に明らかにされて有力であるかぎり」(393d)、「字母の力（δύναμις）を明らかにして入れる限り」(393e)、「ロゴスがそれについてであるものの型（τύπος）が内在する限り」(433e) と表現される。

(22) 391a　(23) 391c～421c　(24) 391ab　(25) 396d～397a,400d～401a,401a,401e,411a,414d,425d～426b,428a,428d

(26) 397ac　(27) 396a,399b,410d,421a,421de など　(28) 422cd cf. 二(2)〈c iii〉　(29) cf. 註(11)(60)

(30) 421de,cf. 426ab,434b,Tht. 206b　(31) 416cd,cf. Tht. 189e～190a,206de, Soph. 264ab

(32) 422d～424b　(33) 430a　(34) 430 c,cf. Tht. 184c～185d　(35) しかし、「正しい」と「真の」とが、或る意味では異ることが暗示されたのではないか。

(36) cf. Tht. 160b

(37) G. Ryle "Letters and Syllables" in Plato. Philosophical Review 1960 の第一の論点は、プラトンの「ストイケイオン」が果して「字母」であったか「子音」であったかの吟味に向けられている。

(38) cf. Tht. 155ab,204b～205a

(39) 以上、430a～433b

(40) 434b cf. 386e

(41) cf. 433e4 ヘルモゲネスの協定説では語られなかった条件が明確化されているのである。

(42) 「類似（ὁμοιότης）」をめぐる分割（διαίρεσις）（424b～427e）が、実は二義的であったことを理解しうる。

(43) 以上 433b～435d

(44) cf. 41頁

(45) 435d～440e

(46) Tht. 152c, 160c, 186c, Euthyd. 284e

(47) cf. Men. 80d sq. 特に 81cd、『想起説』の根拠として語られる。

(48) 439d

(49) 439d～440c cf. Tht. 183ab

(50) その条件の考察は、今は困難である。

(51) cf. 一(3)〈b〉〈iv〉

(52) この意味は後に考える。47頁

(53) オックスフォード希英大辞典を参照

(54) Tht. 176b

(55) cf. Phd. 103b5 ἐν φύσει…ἐν ἡμῖν

(56) 典型（パラデイグマ）—模像（イコーン）という意味でいう。

(57) e. g. G. Ryle op. cit. p. 445 "…though in the Cratylus (385B—C) Socrates pretends that the parts of a true sentence must themselves be true" その他同様に、R. Robinson: Philosophical Review vol. 65 p. 329, N. Gulley: Plato's Theory of Knowledge p. 69, I. M. Crombi: An Examination of Plato's Doctrine P.476 特にロビンソンの議論は、unfair であり pointless と思われる。（下線筆者）

(58) 希英辞典を見よ。例えばプラトンでは Phdr. 241d. Ap. 19cd, 23a, b, d など。「語る」とは「言（こと）をあげつらう」のである。田中美知太郎「テアイテトス」578頁以下参照。大言海に、「語る」＝形（かた）を活用せしめ、事象（かた）を言ふ意なるべし、とある。その他、「かた」「こと」「名」「なり」「す（素）」「すがた」「ただし」等、もし説く所が真実であれば、まさしくイデア論さながらであり、驚かされる。

(59) cf. 一(2)〈a〉

(60) この場合、『クラチュロス』は、名とレーマとを、一つには区別し、又一つには区別しないので、そこでこれを、λόγος＝ὄνομα＋ῥῆμα に改めてもよいだろう。しかし問題はそこにあるのではない。cf. 註(11)

(61) 希英辞典を見よ。

(62) 424b 以下の、分割（イアイレシス）の出発方向（トロポス）、その行程（ホドス）の分析を参照、註(42)にも既に触れたが、このトロポスとホドスを持つか否かが実は問われているのである。

(63) cf. 430d「ふりあて」は一方は「正しく」に加えて「真の」と言われるが、他方は「虚偽の」としか言われていない。cf. 註(35)

(64) 我々は、385d2 の ἄρα の心理と論理を深く正しく読まねばならない。

(65) cf. 註(36)、「必然」というものの考察がなされねばならぬであろう。恐らくは「パイドン」95 e 以下のもつ新たな展開が、その重要なヒントであろう。

(66) 「メノン」80 d e における議論である。

(67) [ὄνομα(名)] はもともと [γνώμα(しるし)] であり、それは [γιγνώσκειν(見知る)] されたものである。なお、角川、漢和中辞典「知」の項参照、註(41)参照

(68) 424c ὅσα διάφορα ἔχει ἀλλήλων

(69) 51頁以下

(70) Phdr. 249bc

(71) cf. 一(3)〈a i〉

(72) 一(2)〈c〉のアナロジーである。

(73) 「クラチュロス」におけるディアレスティコスは、「国家」Ⅳ巻の上昇・下降の道のうち、下降に属するだろう。勿論、上昇・下降も単純な二つの道ではない。

(74) つまり、「我々において」だけでは両者は、全く成立しない。必ず「典型」又は「自然」によって不可逆的に原因づけられねばならぬということである。cf. Phd. 95e sq. 103b.

(75) 428de

(76) cf. 一(2)〈c vii〉。

(77) Resp. 505a

(78) Tht.176b

(79) Phd.99d sq.

(80) Phd.85 cd

（第一薬科大学講師。昭和四十一年本学大学院修士課程修了・哲学）